

1. 4月6日(水) 参加者数:12名 個別
支援会議(児童) 主催者:宇佐市役所
概要:行政、サービス提供機関
2. 5月11日(水) 参加者数:80名 相談援
助職の面接技術(高次脳にも触れて研修を行っ
た)
主催者:大分県障がい福祉課
概要:福祉行政職員へ高次脳理解の研修
3. 5月26日(木) 参加者数:5名 個別支
援会議 主催者:障がい者生活支援センター
概要:サービス事業所を含めカンファ
4. 6月1日(水) 参加者数:20名 脳機能
勉強会主催者:別府リハ(病棟)
5. 6月1日(水) 参加者数:50名 職員研
修会(高次脳機能障がいの理解)
主催者:障がい者支援施設
概要:ヘルパーサービス事業所職員
6. 6月11日(土) 参加者数:130名 高次脳
機能障がいのリハ施設の取り組み
主催者:福岡県医療ソーシャルワーカー協会
7. 6月14日(火) 参加者数:30名
ヘルパー研修1 主催者:大分県
8. 6月21日(火) 参加者数:30名
ヘルパー研修2 主催者:大分県
9. 6月28日(火) 参加者数:30名
ヘルパー研修3 主催者:大分県
10. 6月30日(木)参加者数:10名 個別支
援会議主催者:別府医療センター
概要:退院前の生活調整
11. 7月28日(木)参加者数:10名 個別支
援会議主催者:別府医療センター
概要:退院前の生活調整 2回目行政も加わる
12. 8月24日(水)参加者数:10名 研修視
察
主催者:別府大学大学院(心理)
13. 8月24日(水)参加者数:40名 脳の働
きと高次脳機能障がい
主催者:豊後大野市ケアマネ協議会
概要:センター長講義
14. 8月26日(金)参加者数:3名 研修視
察
主催者:中村病院
概要:連携室長以下3名
15. 9月03日(土)参加者数:50名 高次脳
機能障がいの理解(研修講義)
主催者:宮崎県医療ソーシャルワーカー協会
概要:コーディネーターが講義
16. 9月14日(水)参加者数:30名
ヘルパー研修4 主催者:大分県
17. 9月15日(木)参加者数:130名 公開研修
会 主催者:介護保険事業所
概要:センター長講義
18. 9月16日(金)参加者数:150名 ケアマネ
向け研修会
主催者:小林市介護支援専門員(NPO)
19. 9月21日(水)参加者数:10名 個別支援会
議主催者:別府医療センター
20. 10月8日(土)参加者数:14名 障がい
者支援施設 家族教室
主催者:障がい者支援施設にじ
21. 10月29日(土)参加者数:50名 高次
脳機能障がいの支援について
主催者:愛媛県医療ソーシャルワーカー協会
概要:施設紹介、リハの紹介など
22. 11月5日(土)参加者数:8名 障がい
者支援施設 家族教室
主催者:障がい者支援施設にじ

23. 11月29日(火)参加者数:6名 病棟カ
ンファ主催者:別府リハ(病棟)

24. 2月4日(土)参加者数:17名 障がい
者支援施設 家族教室

主催者:障がい者支援施設にじ

25. 3月26日(月)参加者数:20名 犯罪者
の社会復帰の調整会議

主催者:大分県地域定着支援センター

【活動内容】

◇広報・啓発 パンフレット作成

◇情報収集・調査 アンケート調査(対象:障
がい者施設231事業所)

◇診断評価・リハビリ(入院,外来) 外来:
156名

◇その他

【事業課題】

特になし

大分県

【支援拠点(協力)機関名】

医療法人光心会 諏訪の杜病院

【相談支援コーディネイター】

浅倉恵子(作業療法士)

【相談事業】

◇当事者/家族からの直接相談のべ件数

合計 518件

内訳:電話 226件

来院/来所 290件

メール・書簡 2件

その他(訪問・出張・同行等)0件

◇機関・施設等からの間接相談のべ件数

合計 311件

内訳:電話 266件

来院/来所 38件

メール・書簡 3件

その他(訪問・出張・同行等)4件

【主催した連絡会・協議会】

1. 大分県高次脳機能障がい支援拠点会議

6月21日 別府リハビリテーションセンター

1月26日 諏訪の杜病院

2. 大分県高次脳機能障害支援連携調整委員会

3月2日 大分県社会福祉介護研修センタ

ー

【主催した研修事業】

1. 平成23年度大分県高次脳機能障害連絡協議
会総会 5月21日

大分県消費生活・男女共同参画プラザ「アイネ
ス」 53名

2. 第13回大分県高次脳機能障害リハビリテー
ション講習会 8月28日 別府ビーコンプラザ

173名

3. 第14回大分県高次脳機能障害リハビリテー
ション講習会 1月8日

大分県消費生活・男女共同参画プラザ「アイネ
ス」 127名

【主催したケース会議,勉強会,研究会,家族
会,交流会等】

ケース会議 147件 644人

【協力した会合】

1. 九州保健福祉大学 作業療法科 講義
5月28日・7月23日

2. 平成23年度第1回 高次脳機能障害支援コ
ーディネイター 全国会議 出席 7月5日

3. 平成23年度第1回 高次脳機能障害支援普
及全国連絡協議会 出席 7月6日

4. 平成23年度大分県自立支援協議会
出席

7月27日・12月14日・2月29日

5. 平成23年度厚労科研費研究班九州ブロック
会議 出席 7月29日

6. 琉球リハビリテーション学院
特別講演
9月9日
7. 愛知医科大学 特別講演 9月14日
8. 愛媛県作業療法協会公開講座 特別講演
9月25日
9. セントケア古国府 施設内研修会 講義
9月25日
10. 平松学園大分リハビリテーション専門学校
PT・OT科1年生講義
毎週火曜日（後期）
11. 第4回大分県地域リハビリテーション・
ケア大会 発表 10月23日
12. 大分県立病院 施設及び見学研修会
11月17日
13. 全国高次脳機能障害情報支援マップ作成
事業
第2回ワーキング検討会議 参加 12月4日
14. NASVA 情報交換会 参加 12月8日
15. 大分県自立支援協議会会議 参加
12月14日
16. 大分県NASVA 情報交換会 参加 12月17日
17. 九州保健福祉大学 作業療法科1年 特別
講演 12月26日
18. 大分県臨床心理士会 定例研修会 発表
1月11日
19. 長崎県高次脳機能障害リハビリテーション
講習会 講義 1月21日
20. 豊肥地区在宅介護支援センター協議会
施設研修会 講義 2月15日
21. 平成23年度第2回支援コーディネーター
全国会議 参加 2月23日
22. 平成23年度第2回高次脳機能障害支援普及
全国連絡協議会 参加 2月24日
23. 大分県高次脳機能障害連携調整委員会

- 3月2日
 24. 全国高次脳機能障害情報支援マップ作成
事業
第3回ワーキング検討会議 参加 3月11日
 25. 脳外傷友の会「おおいた」家族会参加
3月17日
 26. 高次脳機能障害、発達障害障害児キャンプ
（沖縄） 3月26～29日
- 【活動内容】
- ◇リーフレットの作成
 - ◇大分県障害者福祉施設へのアンケート調査
 - ◇診断評価・リハビリ（入院、外来）
 - ◇その他
- 【事業課題】
- ◇小児の高次脳機能障害に対する支援
 - ◇居住地の確保
（特に感情のコントロールなど社会的行動障害を有する方）

宮崎県

- 【支援拠点（協力）機関名】
- 宮崎県身体障害者相談センター
宮崎大学医学部附属病院
- 【相談支援コーディネーター】
- 富永昌志（行政） 中村久子（保健師）
中武潤（作業療法士） 永田真哉（作業療法士）
- 【相談事業】
- ◇当事者／家族からの直接相談のべ件数
- | | |
|----------------|-----|
| 合計 | 67件 |
| 内訳：電話 | 42件 |
| 来院／来所 | 24件 |
| メール・書簡 | 0件 |
| その他（訪問・出張・同行等） | 1件 |
- ◇機関・施設等からの間接相談のべ件数
- | | |
|----|-----|
| 合計 | 73件 |
|----|-----|

内訳：電話 60件
 来院／来所 13件
 メール・書簡 0件
 その他（訪問・出張・同行等）0件

◇大学附属病院受診

合計 14件

内訳：電話 2件
 来院／来所 12件

【主催した連絡会・協議会】

〈大学医学部附属病院〉

ケース会議 7件

勉強会・研究会 26件

【主催した研修事業】

1. 身体（知的）障がい者福祉業務担当者会議
 平成23年 4月28日 県総合保健センター
 59名

2. 医師向け高次脳機能障がい講演会
 平成23年10月28日 県医師会館
 106名

3. セラピスト向け高次脳機能障がい研修会
 平成24年 2月18日 県総合保健センター
 70名

【主催したケース会議，勉強会，研究会，家族会，交流会等】

1. 宮崎高次脳機能障がい家族会 あかり
 年6回（第3土曜日） 県総合保健センター5
 回 宮崎市中央公民館1回

計122名

ゲーム・調理・当事者の話・座談会・高次脳機能障がいDVD鑑賞

2. 講習会 介護支援専門員対象
 平成23年 9月 8日 小林市 40名

3. 講習会 施設職員対象
 平成23年10月19日 新富町 16名

4. 講習会 民生委員対象

平成23年11月18日 延岡市 140名

5. 講習会 市職員対象

平成23年11月22日 日南市 20名

【協力した会合】

1. 宮崎リハビリテーション講習会

2. 高次脳機能障害の地域生活支援（クラブハウスすてっぷなな 野々垣睦美）

3. 生活を支える高次脳機能リハビリテーション（国立成育医療研究センター 橋本圭司）

【活動内容】

◇広報・啓発

高次脳機能障がいパンフレット及びリーフレット作成

情報誌（ハピリス・シナプス）発行 各年2回

◇情報収集・調査

高次脳機能障がい受入医療機関・施設調査

◇専門外来 入院精査 リハビリテーション
 大学附属病院

【事業課題】

◇スタッフ増員

◇啓発活動

鹿児島県

【支援拠点（協力）機関名】

鹿児島県高次脳機能障害者支援センター

【相談支援コーディネイター】

尾上佳代子（保健師）

【相談事業】

◇当事者／家族からの直接相談のべ件数

合計 142件

内訳：電話 102件

来院／来所 40件

メール・書簡 0件

その他（訪問・出張・同行等）0件

◇機関・施設等からの間接相談のべ件数

合計 101 件
内訳：電話 97 件
来院／来所 3 件
メール・書簡 1 件
その他（訪問・出張・同行等）0 件

【主催した連絡会・協議会】

高次脳機能障害者支援ネットワーク連絡会

1. 期日：平成 23 年 10 月 22 日（土）

場所：大隅地域振興局

参加者：支援拠点病院、肝属地域の支援協力
病院医療機関、介護保険関係機関、保健所、市町
村 19 機関 33 名

2. 期日：平成 24 年 1 月 14 日（土）

場所：県精神保健福祉センター

参加者：支援拠点・協力病院、保健所、市町
村、障害者職業センター 34 機関 61 名

【主催した研修事業】

◇一般県民及び支援者向け研修

期日：平成 24 年 1 月 15 日（日）

場所：県精神保健福祉センター

内容：講話「生活を支える高次脳機能リハビリ
テーション」

講師：国立成育医療研究センター

発達評価センター長 橋本圭司先生

参加者数：144 名

◇医療・行政関係者向け研修

1. 期日：平成 23 年 10 月 22 日（土）

場所：大隅地域振興局大会議室

内容：講演 1「高次脳機能障害の概要と診断、
リハビリテーション」

講師：鹿児島大学名誉教授 浜田博
文先生

講演 2「精神保健福祉手帳申請などに係
る診断書作成の要点」

講師：鹿児島県精神保健福祉センタ

一所长 富永秀文

参加者数：64 名

2. 期日：平成 24 年 1 月 14 日（土）

場所：県精神保健福祉センター

内容：講話「高次脳機能障害～診断・治療・支援
のコツ～」

講師：国立成育医療研究センター 発達評価セ
ンター長 橋本圭司先生

参加者数：213 名

【協力した会合】

6 月 18 日（土） 高次脳機能障害「ぷらむ」

鹿児島総会への出席

主催：「ぷらむ」鹿児島

場所：ハートピアかごしま

【活動内容】

◇地域ネットワーク構築に向けた取り組み：県
内全域及び保健医療圏域毎にネットワーク連絡
会を開催

◇専門家のスキルアップ研修（県内全域及び保
健医療圏域毎）

◇情報提供（新手引き作成）

◇家族会支援：「ぷらむ」鹿児島の拠点となる事
務局を精神保健福祉センター内に設置（H23 年
4 月～）

【事業課題】

地域ネットワークの拡充：支援拠点病院、支援
協力病院、相談支援事業所、介護関連施設、就
労支援機関などとの連携強化

沖縄県

【支援拠点（協力）機関名】

医療法人タピック 沖縄リハビリテーションセ
ンター病院

【相談支援コーディネイター】

鈴木 里志（作業療法士）

平良 淳子 (精神保健福祉士)

【相談事業】

◇当事者／家族からの直接相談のべ件数

合計	172 件
内訳：電話	88 件
来院／来所	84 件
メール・書簡	0 件
その他（訪問・出張・同行等）	0 件

◇機関・施設等からの間接相談のべ件数

合計	174 件
内訳：電話	145 件
来院／来所	25 件
メール・書簡	0 件
その他（訪問・出張・同行等）	4 件

【主催した連絡会・協議会】

1. 沖縄県高次脳機能障害支援普及事業 拠点
機関連絡会議

共 催：沖縄県障害保健福祉課・沖縄リハビリ
テーションセンター病院・平安病院

日 程：平成 23 年 4 月～平成 24 年 3 月 隔月
1 回 [合計 7 回]

場 所：沖縄リハビリテーションセンター病院

概 要：事業実施状況の報告ならびにケースス
タディ

参加者：56 名 [延人員 10 名]

【主催した研修事業】

研修会名：平成 23 年度沖縄県高次脳機能障害支
援普及事業講演会

体験から学ぶ高次脳機能障害 ～当事者・家族
からのメッセージ～

日 程：平成 23 年 11 月 26 日

場 所：浦添市てだこホール

概 要：当事者・家族による体験談の報告およ
びシンポジウム

講 師：[県外] 当事者・家族 2 組 ※広島・島

根の拠点機関より紹介

：[県内] 当事者・家族 2 組

参加者：256 名

【主催したケース会議，勉強会，研究会，家族
会，交流会等】

名 称：集団認知プログラム『あるがまま』

主催者：沖縄リハビリテーションセンター病院

日 程：平成 23 年 4 月～平成 24 年 2 月 毎月
1 回 [合計 10 回]

場 所：沖縄リハビリテーションセンター病院

概 要：認知トレーニング・集団認知行動プログ
ラム

参加者：224 名 [延人数 20 名]

【協力した会合】

1. 研修会・講演会

1) 名称：「高次脳機能障害研修会」

主催：就労支援事業所 くわの実

日程：平成 23 年 5 月 6 日

場所：就労支援事業所 くわの実

概要：高次脳機能障害者の就労支援について
(講演)

2) 名称：「サービス管理責任者研修」

主催：沖縄県社会福祉士会

日程：平成 23 年 5 月 9 日

場所：沖縄県総合福祉センター

概要：高次脳機能障害と地域連携について (講
演)

3) 名称：「沖縄市介護支援専門員研修会」

主催：ガウディ会

日程：平成 23 年 7 月 12 日

場所：グループホームふれあい

概要：高次脳機能障害の支援のポイントについ
て (講演)

4) 名称：「高次脳機能障害～語りにも寄った支
援～」

主催：脳外傷友の会ゆい沖縄
日程：平成23年9月10日
場所：沖縄県総合福祉センター
概要：高次脳機能障害の支援方法について（出席）

5) 名称：「沖縄県言語聴覚士研修会」

主催：高次脳機能障害支援普及事業～沖縄県の取り組み～

日程：平成23年12月11日

場所：沖縄リハビリテーションセンター病院

概要：当該事業の実施状況について（講演）

6) 名称：「コロンビア障害者総合リハビリテーション体制強化プロジェクト」

主催：JICA

日程：平成24年2月21日

場所：沖縄リハビリテーションセンター病院

概要：高次脳機能障害と支援普及事業について（講演）

7) 名称：「高次脳リハビリテーション講習会」
生活版ジョブコーチと回復期病院の高次脳機能障害者への取り組み

主催：平安病院

日程：平成24年2月12日

場所：沖縄県総合福祉センター

概要：県内回復期病院での高次脳機能障害者への取り組み（講演）

8) 名称：「高次脳機能障害支援普及事業講習会」
拠点病院における高次脳機能障害者支援の実際

主催：平安病院

日程：平成24年3月24日

場所：宮古福祉保健所

概要：高次脳機能障害者の生活支援（講演）

9) 名称：「沖縄県中部地区相談支援専門員研修会」

主催：沖縄県中部福祉保健所

日程：平成23年5月～平成24年3月 3ヶ月に1回 [合計4回]

場所：中部福祉保健所

概要：相談支援専門員のスキルアップを目的とした研修（出席・発表）

2. 連絡会・協議会

1) 名称：「沖縄県中部地区関係機関ネットワーク会議」

主催：沖縄県中部福祉保健所

日程：平成23年5月～平成24年3月 毎月1回 [合計11回]

場所：中部福祉保健所

概要：地域連携と多職種間連携を目的としたワークショップ（出席・発表）

2) 名称：「市町村障害福祉関係主管課長等会議」

主催：沖縄県福祉保健部障害保健福祉課

日程：平成23年4月～平成24年3月 不定 [合計2回]

場所：浦添市てだこホール

概要：地域移行支援に係る会議（出席）

【活動内容】

◇広報・啓発

・ポスター、高次脳情報冊子

[おきなわ高次脳機能障害ガイドブック～リンク～]の作成・配布

◇診断評価・リハビリ（入院、外来）

・回復期病棟入院治療

・高次脳外来整備し、診断・評価・リハビリ・デイケアサービスを提供

【事業課題】

◇医療と福祉間の連携強化

◇地域ネットワークとの連携

◇遠隔地支援（離島など）の検討

沖縄県

【支援拠点（協力）機関名】

医療法人 へいあん 平安病院

【相談支援コーディネーター】

波平 智雄（医師）

赤嶺 洋司（臨床心理士）

新垣 香織（精神保健福祉士）

伊井 統章（精神保健福祉士）

【相談事業】

◇当事者／家族からの直接相談のべ件数

合計 246 件

内訳：電話 88 件

来院／来所 132 件

メール・書簡 0 件

その他（訪問・出張・同行等）26 件

◇機関・施設等からの間接相談のべ件数

合計 202 件

内訳：電話 183 件

来院／来所 7 件

メール・書簡 0 件

その他（訪問・出張・同行等）12 件

【主催した連絡会・協議会】

1. 高次脳拠点病院連絡会

主催：平安病院

日時：①H23年6月28日

②H23年8月30日

③H23年10月25日

④H23年12月27日

⑤H24年2月28日

場所：平安病院

参加者：①4名 ②4名③4名④6名⑤5名

【主催した研修事業】

1. 高次脳機能障害支援普及事業講習会

日時：H24年2月12日

13：00～16：30

場所：沖縄県総合福祉センター ゆいホール

概要：「生活版ジョブコーチと県外回復期病院の高次脳機能障害者への取り組み」

参加者：225名

2. 高次脳機能障害セミナー

日時：H24年3月24日（土）

13：00～16：30

場所：宮古福祉保健所

概要：「拠点病院における高次脳機能障害者支援の実際～支援のネットワークの現状～」

参加者：29名

【主催したケース会議、勉強会、研究会、家族会、交流会等】

〈ケース会議〉

名称：O・S氏の支援会議

日程：H23年

場所：平安病院 会議室

参加者：9名

〈家族会〉

1) 第1回 高次脳機能障害者家族のつどい

主催：平安病院

日程：H23年4月28日（木）

14時～16時

場所：平安病院 経塚苑ホール

概要：「家族としてどう向き合うか」

講師：上田 幸彦先生（沖縄国際大学）

参加者：15名

2) 第2回 高次脳機能障害者家族のつどい

日程：H23年6月23日（木）

14時～16時

場所：平安病院 経塚苑ホール

概要：「高次脳機能障害について」

講師：伊井 統章（平安病院）

参加者：10名

3) 第3回 高次脳機能障害者家族のつどい

日 程：H23年8月25日（木）
14時～16時
場 所：平安病院 経塚苑ホール
概 要：「高次脳機能障害グループ訓練 チャレンジ」
講 師：照屋 若菜（平安病院）
参加者：20名

4) 第4回 高次脳機能障害家族のつどい

日 程：H23年10月27日（木）
14時～16時
場 所：平安病院 経塚苑ホール
概 要：「就労支援の現場から」
参加者：8人

5) 第5回 高次脳機能障害家族のつどい

日 程：H24年2月23日（木）
14時～16時
場 所：平安病院 経塚苑ホール
概 要：「就労までの道 そしてこれから」
～当事者とご家族の声～
参加者：17人

【協力した会合】

〈ケース会議〉

B氏：①5名②8名
(就労移行支援事業所さわやか)
C氏：①4名②5名③4名
(就労移行支援事業所さわやか)
D氏：①7名②4名③5名
(就労移行支援事業所さわやか)
E氏：①2名②4名
(就労移行支援事業所さわやか)
F氏：①5名（障害者職業センター）
G氏：①4名（就労移行支援事業所さわやか）
H氏：①5名（大浜第一病院）
I氏：①13名（支援センターゆいゆい）

〈高次脳講演会〉

1) 伊是名村講演会・ケースカンファレンス

主 催：伊是名村役場
日 程：H23年6月10日
場 所：伊是名村

概 要：高次脳機能障害について

2) 高次脳機能障害～語りに寄り添った支援～

主 催：脳損傷友の会 ゆい沖縄
日 時：H23年9月10日
場 所：沖縄県総合福祉センター

概 要：高次脳機能障害の支援方法について

3) 高次脳機能障害支援普及事業講演会

主催：沖縄リハビリテーションセンター病院
日 時：H23年11月26日
場 所：てだこホール

概 要：体験から学ぶ高次脳機能障害 ～当事者・家族からのメッセージ～

参加者：256名

〈会議〉

1) 高次脳拠点病院連絡会

主 催：沖縄リハビリテーションセンター病院
日 時：①H23年4月26日
②H23年5月31日

③H23年7月28日

④H23年9月27日

⑤H23年11月29日

⑥H24年1月31日

⑦H24年4月4日

場 所：沖縄リハビリテーションセンター病院

参加者：①4名②10名 ③6名 ④6名⑤6名⑥6名⑦4名

2) 平成23年度 厚労科研費研究班九州ブロック会議

主 催：産業医科大学
日 時：H23年7月29日

場 所：貝塚合同庁舎

〈情報マップ作成事業〉

1) 情報マップワーキング 第2回検討会

日 時：H23年12月3日

場 所：損保会館

2) 情報マップワーキング 第3回検討会

日 時：H24年3月11日

場 所：損保会館

参加者：19名

【活動内容】

◇診断評価・リハビリ（入院，外来）

・診断、評価、認知リハビリ、カウンセリング、
入院・外来治療

◇精神疾患に関する薬物療法

◇就労支援・復職支援

◇生活訓練

◇デイケアにおける高次脳プログラム（チャレン
ジ）

【事業課題】

◇高次脳機能障害者の自動車運転に関する検討。

◇離島での高次脳機能障害の評価・リハビリ。

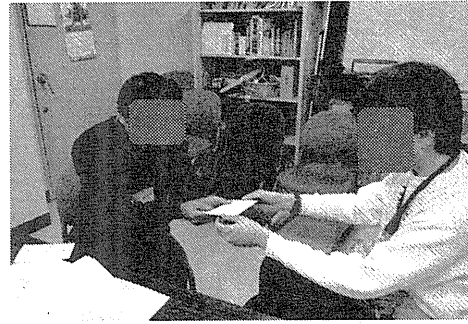
◇離島でのネットワーク構築。

4) 産業医科大学におけるその他の高次脳機能
障害支援活動

a) 社会復帰準備のためのリハビリテーション
学級

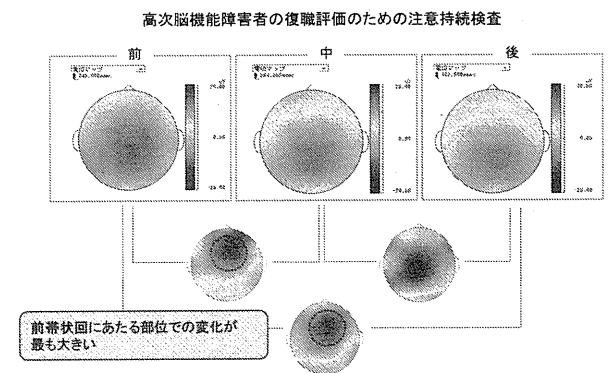
入院や通院訓練等の医療リハビリテーション
を完了しても社会復帰が困難である高次脳機能
障害患者2名に対して、社会復帰準備のための
リハビリテーション学級を水曜日の午後、約2
時間30分の設定で10回実施した。日常生活に
おける意欲の向上、自らの高次脳機能障害の理
解促進、参加者や医療スタッフとの交流が深ま
り声かけや挨拶など基本的な社会技能の向上が

認められた。



b) 長時間の注意持続評価

長時間の注意持続評価法として、750回刺激
による聴覚オドボール課題時のP300を、健常者
14名に実施した。課題の前期と中期間、前期と
後期間において前帯状回にあたる部位での振幅
に有意差を認め、課題遂行中の注意力低下が示
唆された。以上より本法は高次脳機能障害者へ
の注意持続検査として利用できると考える。



c) 簡易自動車運転シミュレーションと従来の
神経心理学的検査の関連

路上運転評価を予測するスクリーニング検査
に関するシステムティック・レビューでは、
Trail Making Test (TMT)、Rey 複雑図形の有用
性が挙げられている。TMT は選択的注意・配分
的注意などの注意機能、Rey 複雑図形は視空間
構成能力、視覚性記憶などを評価しており、そ
れぞれの機能が自動車運転に重要とされている。
脳損傷者 41 名において簡易自動車運転シミュ

レーション成績と TMT、Rey 複雑図形の相関をみると、認知反応時間の標準偏差と TMT-A、B、予測時間の標準偏差と TMT-B の結果に相関が見られた。本検査は自動車運転に重要とされる注意機能の要素を含むことが確かめられ、反応のぼらつく者や速度見越しがぼらつく者は注意の選択、配分機能が低下していることが示唆された。

d) 簡易心理検査の青年標準値

15～30歳の健常青年117名を対象に簡易心理検査（Trail making Test、Wisconsin Card Sorting Test 慶應 F-S 版）の青年標準値を設定し、論文化中である。

D. 考察

高次脳機能障害のリハビリテーションを熟知した専門家に各県を代表してブロック委員に就任していただいた。支援コーディネイターおよび行政担当者と合同でブロック会議を開催し、研修や各県の支援事業の状況を報告し討議する中で、情報の交換や共有化を行った。ブロック会議に合わせて支援コーディネイター同士での情報交換の場も設け、各県の支援のあり方の再認識や県域をまたいだ支援を円滑に運ぶうえでも有意義であった。九州地区では平成21年までの時点で8県全てに高次脳機能障害支援拠点機関を設置し、配置された支援コーディネイターを中心とした支援スタッフが経験を積みながら平成23年度は一層発展した内容で事業を推進することができた。

しかし、高次脳機能障害者や家族に相談に応じて支援を行うにあたって、高次脳機能障害者に適した実際に役立つサービスが地域に乏しい状態が解消されていない。今後も支援体制について量的のみならず質的充実をも課題として取

り組むことが重要であろう。

E. 結論

九州各県から12名の九州ブロック委員を選任し、行政担当者と合同でブロック会議を開催した。各県における相談件数は5,317件となり、研修会や研究会の参加者も3,256人であった。

産業医科大学では高次脳機能障害者の地域生活支援の一環として、社会復帰準備のためのリハビリテーション学級の開催、長時間の注意持続評価法として健常者14名のP300の振幅変化を検討、41名の脳損傷者において左右中央への注意配分課題を追加した簡易自動車運転シミュレーションと従来の神経心理学的机上検査の関連を検討した。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 発表論文

末尾に掲載する。

2. 学会発表

末尾に掲載する。

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

学会発表

演者名	タイトル	開催日	学会名	開催地
川邊 千津子 近藤 くにこ 森田 喜一郎 小路 純央 藤木 僚	高次脳機能障害者におけるトランプ課題（神経衰弱）中の脳血流状態の特徴 事例を通して	2011/06	第 45 回 日本作業療法学会	大宮
近藤 くにこ 川邊 千津子 森田 喜一郎	高次脳機能障害者の自動車（疑似）運転中の視覚運動特性（その2）健常群との比較	2011/06	第 45 回 日本作業療法学会	大宮
川邊 千津子 森田 喜一郎 石井 洋平 小路 純央	高次脳機能障害者の言語課題中の酸素化ヘモグロビンの特徴：健常者との比較検討	2011/10	第 64 回 九州精神神経学会	福岡
井上 雅之 森田 喜一郎 小路 純央 藤木 僚	高次脳機能障害者と健常者のしりとり課題中の酸化ヘモグロビンの変動：表情認知・情動の影響	2011/10	第107回 日本精神神経学会学術総会	東京
蜂須賀 明子 加藤 徳明 蜂須賀 研二	孤立性失書を呈する痙性対麻痺で運動ニューロン疾患が疑われた一例	2011/09	第30回 日本リハビリテーション医学会九州地方会	福岡
蜂須賀 明子 加藤 徳明 岡崎 哲也 田中 雅子 大成 圭子 辻 貞俊 蜂須賀 研二	孤立性失書を呈した痙性対麻痺の一例	2011/10	第16回 認知神経科学会学術集会	北九州
岩井 泰俊 白石 純一郎 岡崎 哲也 蜂須賀 研二	TBI フォロー中にみられたPDFFTBI (Psychotic Disorder Following Traumatic Brain Injury) の3 症例	2011/10	第16回 認知神経科学会学術集会	北九州
蜂須賀 研二	高次脳機能障害のリハビリテーションと職場復帰	2011/10	第16回 認知神経科学会学術集会	北九州

蜂須賀 研二	高次脳機能障害者の社会復帰	2011/10	リハビリテーション・ ケア合同研究大会くま もと 2011	熊本
加藤 徳明 岡崎 哲也 蜂須賀 研二 松永 勝也	高次脳機能障害者の運転状況 調査	2011/11	第 4 回 運転と認知機 能研究会	東京
岩永 勝 蜂須賀 明子 加藤 徳明 岡崎 哲也 佐伯 覚 蜂須賀 研二	Sustained attention の障害に 対する事象関連電位を用いた 評価の検討	2011/11	第 48 回 日本リハビリ テーション医学会	千葉
岩永 勝 蜂須賀 明子 加藤 徳明 岡崎 哲也 蜂須賀 研二	Sustained attention に対する 事象関連電位を用いた評価の 検討	2011/11	第 41 回 日本臨床神経 生理学会・学術集会	静岡
岡崎 哲也 加藤 徳明 岩永 勝 佐伯 覚 蜂須賀 研二	ウェクスラー知能検査, 記憶 検査の成績差とリバーミード 行動記憶検査の比較	2011/11	第 48 回 日本リハビリ テーション医学会学術 集会	千葉
岡崎 哲也 蜂須賀 研二	左傍矢状洞髄膜種の再発に伴 い書字障害を生じ, 摘出術後 に改善を得た一例	2011/11	第 35 回 日本高次脳機 能障害学会学術総会	鹿児島
樺島 美由紀 中津留 正剛 飯田 真也 武本 暁生 甲斐 明子 岡崎 哲也 蜂須賀 研二	多職種連携による高次脳機能 障害者への就労継続支援の実 際 ～相互乗り入れチームが有効 であった一例～	2011/11	第 35 回 日本高次脳機 能障害学会学術総会	鹿児島

甲斐 明子 飯田 真也 樺島 美由紀 武本 暁生 白山 義洋 加藤 徳明 岡崎 哲也 蜂須賀 研二	当院における「リハビリテーション学級」での気分の変化	2011/11	第35回 日本高次脳機能障害学会学術総会	鹿児島
蜂須賀 明子 岡崎 哲也 蜂須賀 研二 大成 圭子 辻 貞俊	痙性対麻痺の症状を呈し孤立性失書を認めた一例	2011/11	第28回 北九州高次脳機能研究会	北九州
森 俊子 蜂須賀 研二	前交通動脈瘤破裂によるくも膜下出血後に前脳基底部健忘症を呈した一例	2011/11	第48回 日本リハビリテーション医学会学術集会	千葉

論文

筆頭著者	タイトル	出版年月	雑誌名	巻	ページ
蜂須賀 研二	高次脳機能障害のリハビリテーション	2011/05	認知神経科学	Vol 13 No1	22-28

高次脳機能障害者の地域生活支援の推進に関する研究

分担研究者 太田令子
千葉県千葉リハビリテーションセンター
高次脳機能障害支援センター長

研究要旨

平成 21 年度当センター高次脳機能障害児(18 歳未満で発症)を中心に、支援ニーズアンケート調査を実施。平成 22～23 年度にかけて全国支援コーディネーターの協力を得て「小児期受傷・発症の高次脳機能障害児者の支援実態調査」を実施し、小児期に受傷・発症した高次脳機能障害児者への支援実態を明らかにした。また、千葉県の高次脳機能障害支援普及事業の支援拠点機関として、高次脳機能障害者への支援を展開した。

A. 研究目的

(1)小児期に受傷・発症した高次脳機能障害者の支援実態調査について

小児期に受傷・発症者が、どういった支援を受けてきたのかはほとんど実態が把握できていない。現状でどのような支援ニーズがあるかを明らかにし、こうした支援ニーズを有する小児期受傷・発症者がどのような支援を受けてきたかの実態を明らかにし、今後の高次脳機能障害児の支援体制構築に資するものとする。

(2)病院機能を持つ医療施設・新たに設置された高次脳機能障害支援センター・障害者生活支援施設更生園・肢体不自由児施設愛育園が連携しながら、千葉県の高次脳機能障害支援普及事業の支援拠点機関として活動してきた実績を報告する。

B. 研究方法

(1)小児期(18 歳未満)発症の支援実態(発症時代・支援開始時期・初期支援・支援機関での支援内容等)を全国支援コーディネーターの協力を得て調査し、21 年度に実施した支援ニーズ調査の結果を基に、小児期の高次脳機能障害児が必要としている支援等について、発症時代別に検討する。

(2)支援拠点機関としての活動について

千葉県千葉リハビリテーションセンターとして、各部署を中心に 4 つのプロジェクトを設置し活動を展開する。

C. 研究結果

(1)小児期に受傷・発症した高次脳機能障害者の支援実態調査について

【対象の属性】全国 63 支援拠点機関のうち 24 都

道府県(51%) 26 機関(41%)の協力を得た。発症時年齢は、6 歳以下の未就学時の受傷・発症者が 41 件(24%)、7～12 歳の小学生時が 61 件(35%)、13～18 歳の中学・高校生時が 71 件(41%)であった。有する高次脳機能障害については、記憶障害はじめ発動性の低下・抑うつまでの 15 の項目に関して、記憶障害・注意障害・遂行機能障害を有する者がそれぞれ 148 人・155 人・121 人と成人期発症者と同様の結果であった。これらの障害保有数は一人平均 6.1 個と成人期発症者と変わりなく多かった。この結果から、小児期発症の高次脳機能障害者の社会適応に必要な支援をする場合、成人期発症者同様に、ターゲットとすべき障害が数多く、支援のプログラム/内容/場面/期間の設定に専門的な技量が必要になることが推察できる。しかも小児期発症であることはライフステージの転換があり、支援の体系がその都度変わること適応に関する危機の時期が何度もあるといえる。【支援実態】具体的な支援について報告する。支援拠点機関等への紹介元をみると、医療機関 107 件/学校等教育機関 5 件/行政等相談機関 14 件/福祉施設 10 件/本人・家族・その他 34 件/不明 3 件であった。中でも平成 13 年度から実施された高次脳機能障害支援モデル事業開始後は医療機関からの紹介が急増していることが特徴である。支援機関から支援を繋いでいった先は学校等の教育機関が 69 件/医療機関 40 件/福祉施設 26 件/行政等相談機関 18 件で、最も多いのは学校等の教育機関であった。時代的には平成 13 年度から学校等教育機関への紹介が急増しており、ここ

でもモデル事業の効果が確認できる。しかし、訓練以外の支援についてみると、情報提供を受けたのが42件、家族等との面談が26件で、ネットワークとなる連携会議や訪問といった方法で支援を受けたのは16件に過ぎなかった。この結果から、小児期発症の高次脳機能障害者に対する支援の場は支援機関の内部で行われることが多く、当事者の生活の場に出かけてネットワークを活性化させながら支援を展開していくには、まだ時間が掛かることが予想される。支援の内容としては入学・復学・修学等に関する具体的な支援を受けたのは107件(62%)に当たる。小学校時代が70件、中学校時代が76件、高等学校時代が67件であった。支援の内容は、入学調整が45件、復学調整が43件、在籍継続(学力・友だち関係等)調整が84件であった。授業内容の理解に関する困難さや対人関係の拙劣さおよび感情コントロールの困難さなど社会的行動に関する問題があり円滑な友だち関係を築くには支援を要することが分かった。教育現場内部でこうした支援がされると、極めて高い効果をもたらすことを考慮すれば、教育機関との良き連携が何よりも必要とされていることが分かる。

(2) 支援拠点機関としての活動について

【高次脳機能障害支援センター】医療的リハ終了後直ちに社会復帰が困難な者に対し、社会適応活動を実施し、その支援プログラムの体系化を始めた。①継続の個別相談や集団活動参加者には、本人の支援ニーズをもとに個別支援計画を作成し、支援目標を明確にした支援を展開。集団活動では、社会適応を支援目標とし、「伝え合うためのグループ」：失語・発動性の低下および実行機能障害・コミュニケーション障害者を中心、ガーデニング：注意切り換え困難・記憶障害・脱抑制者を中心、「働くためのグループ」：注意の持続や配分困難・病識欠如・対人拙劣者中心、家族の集い：集団活動参加者の家族(配偶者と親子を分離)、若者の集い：青年期といった特徴別に実施し支援プログラムの体系化を試みた。②千葉県における地域福祉推進の担い手として地域協同社会づくりを目指すNPO法人と3年間に亘り協働で、高次脳機

能障害者自身が地域のボランティアとして活動する事業を新たな社会参加のあり方として支援してきた。③地域での支援力を高めるための研修会・勉強会を2市2支援事業者と共に定期開催してきた。④広報紙「こ～じのう掲示板」の発行、高次脳機能障害支援センター紹介パンフレット作成(第1、第二版)および「高次脳機能障害者の社会参加ボランティアはじめの一步～高次脳機能障害者のボランティア活動システム～」等のパンフレットを発行した。⑤県内中心に活動する家族会活動への支援、等を行った。【成人高次脳リハPJ】①自動車運転再開に関する支援：視野評価も含めて当センター眼科と連携して運転再開に際しての基準の充実を図った。②メモリーノート：目的別形式の検討と、次への移行に際してのセンター内共通の評価基準の作成を急ぐためワーキンググループを立ち上げ、活動を開始した。③医療リハの効果을上げていくため、心理士による障害認識およびOTによる認知機能(特に注意障害)訓練を集団形式で継続実施。医療的リハでのこうした活動を支援センター社会適応支援に引き継いでいく引き継ぎシートを検討し始めた。【就労移行PJ】更生園(障害者生活支援施設)の職リハを中心に①訓練環境(パソコン機器・軽作業訓練設備)の充実が図られ、②センター他部署との連携強化により、就労までのプロセスが明確化されつつあり、③受け入れ事業所の作業とのマッチングが強化されつつある。特に、職場開拓による“カスタマイズ就労”による新規就労者も出始めており④ジョブコーチが配備され、職場定着に向けた活動も可能になってきた現状がある。【小児高次脳リハPJ】小児期発症の高次脳機能障害児に対する集団活動の場を提供し、社会生活技能の習得(SST)を目的に集団活動を行っている。平成20年6月から開始してきたが、23年度は注意障害へのアプローチ、コミュニケーション(自己認識)障害へのアプローチといった支援障害別2コース、および青年期コースの3つのコースを設定して実施している。また、‘今’のことから‘これから’に家族の目が拡がり始めており、隣接する特別支援学校教員の協力を得ながら家族交流会を開催。

年度末には、就労がテーマの千葉リハ全体の交流会で小児分科会を開催し、小児期発症で就労に至った児の家族の体験談を聞く機会を設け、参加家族から好評を得た。【その他の活動】①千葉県高次脳機能障害支援ネットワーク連絡協議会の課題別ワーキングとして、今年度は当センターと旭神経内科リハビリテーション病院の2支援拠点機関が合同の症例検討会を重ねながら復職支援を実施した。②1月には損保助成の高次脳機能障害リハ講習会で基調講演に産業医科大学教授蜂須賀研二氏を講師に、自動車運転再開をテーマとする講習会を開催。その際、自動車運転再開に関する支援を実施してきた、県南の支援拠点機関である亀田メディカルセンターの協力を得てシンポジウムを開催した。

機関とのスムーズな調整を難しくする要素ともなりやすい。

(2) 支援拠点機関としての活動について

高次脳機能障害者の社会参加ニーズが全国的に高まっており、よりスムーズな社会適応を図るためには、発症からの早期な継続的支援が必要であると同時に、社会参加の多様な形態が求められているため多機関の協働支援が必要となってきた。

D. 考察

(1)小児期発症の高次脳機能障害者高次脳機能障害をもつ人たちの支援実態調査結果から、小児期発症者支援を始めている各都道府県がかなり多くなっている実態が判明した。しかし、現状では情報提供や当事者・家族との個別面談であり、連携調整会議の開催や訪問といった支援機関も含めた協力体制は未だ十分ではない。このことは、学校教育機関との直接調整は家族が担っていることを示し、家族の負担感を増大させ学校教育機関

とのスムーズな連携を難しくする要素ともなりやすいことが推測される。

E. 結論

(1)小児期に受傷・発症した高次脳機能障害者の支援実態調査を実施し、学校教育機関への紹介数の増加に伴い、一人一人に合った学校教育機関との丁寧な連携の必要性が示唆された。各自治体で固有の条件はありながらも、支援システム作りに必要な要素を洗いだし、全国の支援者と協働で検討を進めていく必要がある。

(2) 支援拠点機関としての活動について

県内の支援拠点機関が、各圏域の中心になりながら連携を図り、支援の質を一層向上させていくための支援の体系化を共有していく必要がある。そのためには、県支援拠点機関として中心的な役割を担う当センターの各プロジェクトの成果を、明確な形で全県的に開示していく作業が肝要である。

F. 健康危険情報

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 (分担研究報告書には記入せずに、総括研究報告書にまとめて記入)

G. 研究発表

- 1. 論文発表
- 2. 学会発表

太田令子 高次脳機能障害児の生活支援ニーズ調査の報告 第48回日本リハビリテーション医学会学術集会抄録集 s248 VOL. 48 SUPPL 2011

H. 知的財産権の出願・登録状況
 (特になし)

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
太田令子	「リハビリテーション分野における心理専門職の課題」	リハビリテーション研究	Vol.41 No.2 通巻148	27-32	2011年9月
森戸崇行	「高次脳機能障害者の支援とMSWの関わりー復職支援の事例を通して見えるものー」	『病院』	第70巻第6号		2011年6月

厚生労働科学研究費補助金(こころの健康科学研究事業)
分担研究報告書

高次脳機能障害者の地域生活支援の推進に関する研究

研究分担者 種村 純 川崎医療福祉大学 教授

研究要旨 全国の地域活動支援センター424施設のうち77施設(18%)を失語症者が利用していた。294名の失語症利用者の特徴をみると、脳血管障害を原因として発症時に50~60歳代、運動失語が多く、失語症が重度で、発症後の経過が長かった。基本的ADLは自立していたが、APDLには介助が必要であった。各施設の支援内容はレクリエーション、創作活動が多く、次いで自立訓練や社会資源の利用相談が行われ、言語療法を含むリハビリ訓練や就労支援はほとんど行われていなかった。

A. 研究目的

失語症者の地域生活支援の実態を明らかにするため、一昨年度は中国地方における介護、福祉および就労支援施設を広く対象とした結果、通所介護などの介護保険施設を利用している者が多いことがわかった。昨年度は自立支援、就労移行支援および就労継続支援を行っている施設における失語症利用者について調査した。その結果、介護保険施設を利用している失語症者に比べて年齢が若く、言語障害が軽症であった。積極的に社会復帰を目指すのか、機能の維持を目的にするのかといった、施設の性格に基づいて利用者の層が異なることが明らかになった。本年度は日中活動のための福祉施設である地域活動支援センターを対象として利用する失語症者の実態を明らかにすることを目的とした。

B. 研究方法

対象

全国の地域活動支援センター1947施設であった。

方法

調査票を郵送し、回答用紙を返送してもらった。

調査は2011年6月から9月の間に行った。

調査項目

施設名、所在地、連絡先、

施設の組織・規模：所属、サービス類型、職種別職員数

失語症利用者：性別、原因疾患、年齢、障害程度区分、失語症の類型・重症度、発症からの経過期間、日常生活の活動レベル、

失語症者に対するサービス：サービス内容、失語症者に対応する職種、手帳制度の利用

(付録1)。

C. 研究結果

調査回答施設は424で、回収率は21.8%であった。

施設の所属については、社会福祉法人が172施設(40.6%)と最も多かった(図1)。失語症利用

者がいる施設は77(8.2%)であった。施設全体の利用者数は、男性1,671名、女性1,372名、合計3,043名であった。失語症の利用者数は男性199(11.9%)名、女性95名(6.9%)、合計294(9.7%)名であった(表1)。失語症者の原因疾患は脳梗塞95名(32.4%)、脳出血85名(29.0%)、くも膜下出血24名(8.2%)と、脳血管障害が204名(69.6%)を占めた。脳外傷は35名(11.9%)であった(図2)。

失語症者の年齢は60歳代が最も多く73名(24.8%)で、50歳代59名(20.1%)、40歳代46名(15.6%)の順であった(図3)。失語症の類型では運動性失語136名(46.3%)が多く、健忘失語61名(20.7%)、全失語および感覚性失語それぞれ34名(11.6%)の順になった(図4)。

失語症の重症度では重症者89名(30.3%)、中等度87名(29.6%)、軽度86名(29.3%)と重度から軽度まで広く分布した(図5)。

発症からの経過期間は10年以上110名(37.4%)の者が多く、5年以上10年未満56名(19.0%)の者がそれに次いだ(図6)。日常生活活動の自立度をみると、過半数の者が自立している項目は平地歩行のみで、階段昇降、入浴がそれに次ぎ、食事の用意や預貯金の出し入れの自立度が最も低かった。基礎的ADLも一部介助で、応用的ADL(APDL)は困難であることがわかった(図7)。障害程度区分は区分2(33名、11.3%)が最も多く区分3(27名、9.2%)がそれに次いだ。一方で区分5(19名、6.5%)および6(18名、6.1%)の者もあり、障害が軽度と重度に分かれた(図8)。

失語症者に対応する職種では生活支援員52施設(67.5%)が最も多く、看護師29施設(37.7%)、介護福祉士およびサービス管理者それぞれ28施設(36.4%)がそれに次いだ。リハ専門職は少数であった(図9)。

失語症者に対するサービス内容では、「力を入れて行っている」と回答した比率でみて、過半数の施設で行っているサービスは「レクリエーション」と「創作活動」であった。それに次いで「社会資源の利用相談」、「自立生活のための訓練・支援」、

「身体機能のリハビリテーション」および「コミュニケーション機能のリハビリテーション」が行われていた(図 10)。就労の支援はほとんど行われていなかった。

D. 考察

今回の調査では失語症利用者がいない、という無回答の返信が多かった。これらは本結果に反映されていない。失語症利用者のいる施設からの回答が中心に集計されている。したがって施設全体の利用者の合計 3,043 名に対して失語症利用者が合計 294 名(9.7%)であったが、この 9.7%という比率は実際の失語症利用者の構成比を示すものではないと考えられる。

原因疾患は脳血管障害が多くを占めた。左半球シルヴィウス裂周辺の言語領域を侵す原因としては中大脳動脈領域の脳梗塞か外側型脳出血が多いためと考えられる。外傷性脳損傷における脳挫傷は前方に多く、言語領域を損傷することは比較的少ない。年齢分布の脳血管障害が頻発する中高年に多かった。一方で、介護保険の対象とならない若年層も三分の一程度含まれており、介護保険サービスを利用できない対象者も多く含まれていた。失語症のタイプの分布も失語症全国実態調査(失語症研究、2002)とほぼ同様で、原因疾患の分布を反映していると考えられた。歩行要介助者が比較的多かった。これは右片麻痺を合併するしており、ADL の自立度の結果には失語症のみが関係しているわけではない。しかし、応用的 ADL にはコミュニケーション能力が大きく関与しており、失語症の影響が大きいと思われる。障害程度区分も軽度から重度まで分布したが、運動機能障害の合併によって障害が重度化するものと考えられる。

地域活動支援センターにおける職種の構成上、失語症利用者への対応は生活支援員が中心になるが、ニーズに応じて看護とリハの関係職が関与しているものと考えられる。また、地域活動支援センターにおける主要な活動はレクリエーションと創作活動であるが、それら以外に福祉サービス利用やリハビリテーションのニーズに対応している、と考えられる。

E. 結論

若年から高齢に至る失語症者に対し地域活動支援センターはレクリエーションや創作活動を中心として、自立訓練や社会資源の利用相談などのサービスを行っていた。

F. 健康危険情報

H. 知的財産権の出願・登録状況

- 1.特許取得 なし
- 2.実用新案登録 なし
- 3.その他 なし

特になし

G. 研究発表

1. 論文発表

・種村純、大槻美佳、河村満、他：高次脳機能障害全国実態調査報告、高次脳機能研究、31 巻 1 号、19-31、2011

・種村純：右半球症状の臨床評価 半側無視症候学の発展と関連行動障害、神経心理学、27 巻 2 号、153- 159、2011

・種村純：遂行機能障害のみかた、Jornal of Clinical Rehabilitation、21 巻 1 号、2012

2. 学会発表

・太田信子、種村純：The Cambridge Prospective Memory Test 事象ベース課題における年齢群別成績差の検討、第 35 回日本神経心理学会、2011 年

・狩長弘親、用稲丈人、種村純：高次脳機能障害者の公共交通機関利用と神経心理学的検査との関係、第 35 回日本高次脳機能障害学会、2011 年

・種村純：失語症言語治療のエビデンス、第 35 回日本高次脳機能障害学会、2011 年

・宮崎泰広、種村純、前島伸一郎、大沢愛子、他：伝導失語例における音韻性錯語の分析、第 35 回日本高次脳機能障害学会、2011 年

・太田信子、種村純：展望的記憶時間ベース課題における存在想起と内容想起の障害過程の検討、第 35 回日本高次脳機能障害学会、2011 年

・中田修、種村留美、長尾徹、野田和恵、種村純：高次脳機能障害者の Everyday Technology(ET)使用時の困難さとその支援の検討、第 35 回日本高次脳機能障害学会、2011 年

・宮崎彰子、八木真美、後藤祐之、椿原彰夫、種村純：小児期に発症・受傷し成人期に達した高次脳機能障害者の長期的影響、第 35 回日本高次脳機能障害学会、2011 年

・種村純、室井利英、原大介、椿原彰夫、後藤祐之、中島八十一：失語症者の障害者自立支援法サービス利用状況調査、第 35 回日本高次脳機能障害学会、2011 年

・八木真美、宮崎彰子、後藤祐之、種村純、椿原彰夫：岡山県における小児期に受傷・発症した高次脳機能障害児(者)の実態、第 35 回日本高次脳機能障害学会、2011 年

・小田有基子、宮崎彰子、八木真美、種村純、椿原彰夫：まんがの説明課題における脳損傷者の談話特徴、第 35 回日本高次脳機能障害学会、2011 年

・室井利英、小坂美鶴、種村純、原大介、椿原彰夫、伊藤絵里子：右半球損傷者の談話の評価、第 35 回日本高次脳機能障害学会、2011 年

